

## 紀州へら竿の伝統と継承

和歌山県橋本市

紀州製竿組合

紀州へら竿伝統工芸士会

会長 田中 和仁

(令和三年度助成先)

## ◇沿革

紀州へら竿は、明治十五年に大阪の竿正から始まる伝統技法を現代まで継承し、経産大臣指定の伝統的工芸品に指定されています。へらぶなは大正期から養殖が盛んになり、一大ブームとなったことから、日本各地にへらぶなの釣り堀が作られ、また、池や川でも多くのへら釣り人が見られました。大阪で生み出された紀州へら竿は、紀伊山地で採れる良質の高野竹が原材料として非常に重要なものになりました。やがて、竹の産地に近い橋本市を中心にその生産拠点が移り、親方から弟子へ、手づくりの技法を伝えることなく現代に継承されています。



[紀州へら竿]

昭和四十年ごろから、グラスロッドやカーボンロッドという化学繊維の釣竿が主流になりましたが、紀州へら竿は芸術的ともいえる伝統的な装飾を取り入れ、憧れの釣竿として、関東をはじめ人気を博しています。

## ◇研究池の開設

昭和三十五年ころから台頭してきたカーボン釣竿が高性能であることと、へらぶな養殖技術が向上し、へらぶなが大きくなったことで、紀州へら竿はより強く、道具としての性能を求められることになりました。竿作りの技術を活かして、カーボン釣竿への転向をする職人も多くいましたが、昭和三十七年、約二〇〇人の竹竿職人が紀州製竿組合を結成し、「紀州製竿組合研究池(隠れ谷池)」を開設しました。へら竿の研究所ともいえるこの池に、へらぶなを放流し自ら釣竿の性能を研究することを始めました。そして一般釣り人にも開放し、釣竿の研究と市場調査を、各職人が研究、研鑽する。このことが、カーボンロッド全盛の現代においても、紀州へら竿が現代人の心を癒す道具として在り続ける、大きな要因となっています。

## ◇紀州へら竿の概要

紀州へら竿は、主に三種類の竹を組み合わせ、釣れた時には、あたかも一本の竹のようなきれいな弧を描き、へらぶななどのやり取りを、楽しめるよう設計されています。穂先(一番細いパーツ)は真竹、穂持ち(二番)は高野山周辺の国

有林で採れる高野竹。三番目以降は矢竹の三種類です。世界遺産にも認定された紀伊山地は、自然が手厚く保護されてきたおかげで良質の高野竹が自生し、細くて強靱な性質から、へら竿の材料として丁度良くマツチしました。先人が試行錯誤の末に落ち着いた竹の組み合わせは、非常に優れていたため、今なおそれを超える設計が見当たらず、基本技法として伝承されています。先人の知恵に感謝するところです。紀州へら竿は、完成までに約一年を必要として、約一八〇工程は、そのほとんどが手作業で、材料の確保から、漆塗りまで、ほぼひとりで完成させます。竿師は、完成までの様々な違う技術を習得せねばなりません。逆にそこまで技術を習得してしまえば、他の影響をうけることなく物づくりを続けることができます。



[火入れの工程]

### ◇小中学校での教育事業

現在、橋本市立小中学校の総合学習では、紀州へら竿制作体験や、釣り体験教室に来てほしい。と沢山のご要望があり、より多くの子供たちに紀州へら竿の良さや、手作り品の大事さを知ってもらおうと、一年を通じて多くの子供たち

に体験してもらっています。五〇年を超えるこの小中学生への教育事業は、地域に浸透し、先生、生徒さんから貴重な体験になったとの声をいただいております。



[へら竿制作体験]

### ◇わくわくへらぶな探検隊親子釣り教室について

今年で二三年になる親子釣り教室を実施しています。この親子へらぶな釣り教室は、橋本市内の全校小学五、六年生に案内を送り、橋本市内のボランティア、竿師の有志、橋本市商工会議所、橋本市教育委員会が協同し、実施しているものです。参加人数分の竿やウキ、エサをあらかじめ準備し、手ぶらで釣りに参加できるこのイベントは、釣りをしたことがない子供さん、親御さんでも参加できます。



[親子釣り教室：隠れ谷池]

へらぶな釣りは、すぐに釣れるものではありませんが、信じてエサを投げ続けるよう根気よく指導

し、釣れた時は歓声があがり、努力がむくわれた達成感があります。今後も続けていきたいと考えます。

#### ◇後継者について

令和三年より、橋本市内にあつた後継者育成施設「匠工房」を紀伊清水駅に移設しました。駅舎直結になった匠工房は、入門希望者を竿師が交代で指導し、紀州全体で育てていく後継者育成所です。従来の徒弟制度では、親方が育てるために孤軍奮闘し、双方の苦労も多くなかなか入門を許すことがありませんでした。この匠工房では、お弟子さんは、色んな技術を習得できるほか、従来では五年必要であった徒弟制度を短縮するねらいがあります。現在は生徒さんがなく、竿師が実演をしております。後継者の希望があれば、このように業界として手厚く迎え、この素晴らしい紀州へら竿を継承して行きたい。と今後も、取り組んでいく所存です。



[匠工房：紀伊清水駅]